1997. 7. 6

ブラームス没後100年

市川市文化祭
第 261 回

市響

交響楽の午後

野原みゆり
6. Juillet 97.

1997年7月6日（日）
市川市文化会館

主催 市川市教育委員会 市川交響楽団協会
協賛 千葉県トヨタ販売会社グループ トヨタ自動車株式会社
協力 社団法人 日本アマチュアオーケストラ連盟

TOYOTA
COMMUNITY
CONCERT

市川市文化祭・第261回市響
交響楽の午後

Johannes Brahms

(1883 Hamburg – 1897 Wien)

Anläßlich des 100. Todesjahres von Johannes Brahms
ブラームス没後100年

Programm

Konzert für Klavier und Orchester Nr.1 d-moll op.15
ピアノ協奏曲第1番 二短調 作品15

Maestoso	マエストーソ
Adagio	アダージョ
Rondo. Allegro non troppo	ロンド．アレグロ・ノン・トロッポ

Sinfonie Nr.2 D-dur op.73
交響曲第2番 二長調 作品73

Allegro non troppo	アレグロ・ノン・トロッポ
Adagio non troppo	アダージョ・ノン・トロッポ
Allegro grazioso (Quasi Andantino) – Presto ma non assai	アレグロ・グラジオーソ ープレスト・マ・ノン・アッサイ
Allegro con spirito	アレグロ・コン・スピリート

Midori Nohara, Klavier
ピアノ独奏 野原みどり

Hirofumi Yoshida, Dirigent
指揮 吉田裕史

Ichikawa Symphony Orchestra
市川交響楽団

ピアノ独奏　野原 みどり（のはら みどり）

東京芸術大学音楽学部附属高等学校を経て、同大学首席卒業。在学中に1987年第56回日本音楽コンクール・ピアノ部門第1位、増沢賞・井口賞を受賞。1988年NHK「若い芽のコンサート」に出演。1989年学内にて安宅賞受賞。

1990年パリ、エコール・ノルマルに留学。第42回ブゾーニ国際ピアノコンクールにて、1位なしの3位入賞。併せてリストエチュード賞受賞。1991年ブタペスト・リスト国際ピアノコンクールにて、2位入賞。第23回ロン＝ティボー国際ピアノコンクールにて第1位受賞。この受賞によって一躍注目を集め、パリを始めヨーロッパ各地及び日本国内でコンサート活動を開始。

ロリン・マゼール、小澤征爾など世界的指揮者にも認められ、1994年にはマゼール／フィルハーモニア管弦楽団（巨匠マゼールと世界のオーケストラシリーズ）、小澤／新日本フィルと協演。1995年にはマゼール／ピッツバーグ交響楽団に招かれ、プロコフィエフの協奏曲第2番を協演。ピッツバーグ・トリビューン紙面で「まるでプロコフィエフが彼女のためだけにこの曲を書いたようだ」と絶賛を博した。

また、国内の主要オーケストラの定期公演にも次々と登場。ベルリン・フィル・ヴィルトゥオーゾ日本ツアーのソリスト、プラッソン／ドレスデン・フィル、アンサンブル・ウィーン＝ベルリンのソリストにも選ばれている。さらに日本全国でのリサイタル、NHK「名曲アルバム」「土曜リサイタル」などの放送と、その活躍ぶりに注目が集まっている。

これまでに深沢亮子、高良芳枝、ジュルメーヌ・ムニエの各氏に師事。最近の活動として、リサイタル、国内主要オーケストラとの協演に加え、5月には再度マゼール／フィルハーモニア管弦楽団（巨匠マゼールと世界のオーケストラシリーズ）と協演、絶賛を博している。

指揮　吉田 裕史（よしだ ひろふみ）

1968年生まれ。東京音楽大学音楽学部指揮科卒業。同大学研究科修了。指揮を汐澤安彦、広上淳一、津田雄二郎の各氏に師事。またピアノを岡藤由希子、コントラバスを故小野崎充、音楽理論を有馬礼子、糀場富美子の各氏に師事。

1994･95年、ウィーン国立音楽大学において、ハンス・グラーフ、ユリウス・カールマーの各氏に師事し、ディプロマを取得。終了演奏会においてストラヴィンスキー「春の祭典」ほかを演奏した。

1996年7月　イタリア、シエナ・キジアーナ音楽院において、夏期セミナーを受講、チョン・ミュンフン、ユーリ・テミルカーノフの各氏のもとで学ぶ。同年8月、イタリアのヴァルソダで開催された第19回「マスタープレイヤーズ」国際指揮者コンクールにおいて入賞。

大学在学時より、主にオペラの分野において研鑽を積む。これまでに「フィガロの結婚」「コシ・ファン・トゥッテ」「ラ・ボエーム」「ウエスト・サイド・ストーリー」「シンデレラ」等を指揮。また、二期会本公演「魔笛」では、合唱指揮者をつとめ、同じく二期会「椿姫」、水戸芸術館「フィガロの結婚」、その他「カルメン」「ルクレーシア」等で副指揮者をつとめた。

市川交響楽団、船橋フィルハーモニ管弦楽団、TAMA21交響楽団等を指揮するほか、全国各地のアマチュアオーケストラの活動にも尽力している。市川交響楽団との共演は平成6年の第243回市響「ファミリー交響楽コンサート」でベートーベンのピアノコンチェルト「皇帝」、ブラームスの交響曲第1番を指揮し、好評を博した。

トレーナー　根津昭義（ねづ あきよし）

昭和24年1月6日東京（葛飾区）で生まれる。3才よりヴァイオリンを始める。昭和42年東京大学に入学。翌昭和43年からの学生運動の中で、音楽の道に転身することを決意。昭和46年東京大学卒業後、翌昭和47年東京芸術大学に入学。昭和51年同大学卒業後、NHK交響楽団に入団、現在に至る。山岡耕筰、田中千香士の両氏に師事。現在NHK交響楽団ヴァイオリン奏者、日本演奏連盟会員。

リサイタル、室内楽での演奏活動の他に、地域のアマチュアオーケストラ（市川交響楽団）や後進の指導（Muse音楽教室）も積極的に行っている。

また家族3人でヴァイオリン独奏、ピアノ独奏、ピアノ連弾、ヴァイオリン1台とピアノ2台による合奏と多彩なプログラムによるファミリーコンサートを毎年開く。（子供劇場、チャリティーコンサート、学校、幼稚園の音楽教室等）

ブラームス明暗

須永恆雄（団員・ドイツ文学）

1854年2月27日、ローベルト・シューマンはライン河に投身自殺を計った。幸か不幸か、釣人に救い上げられて翌月4日にエンデニッヒの精神病院に収容されるが、薄明境を彷徨いめぐるまま、ついに再び正気をとり戻すことなく、2年と4箇月余の後、同施設に身罷る。

それよりおよそ1年前の53年4月半ば、ブラームスはヴァイオリニストのレメーニとともに故郷ハンブルクから演奏旅行に出発する。エドゥアルト・レメーニは、パリに始り48年からヨーロッパ中に吹き荒れた革命運動に加担、故国ハンガリーを追われた亡命者であったが、「ハンガリーの民族的旋律」によるジプシイ風の華麗な弾きぶりで聴衆を魅了した。プログラムには慎ましく「レメーニ編曲」と記してあったが、後にブラームスは自作『ハンガリー舞曲』でこれを踏襲する。旅の途上、音の下がったピアノを半音上げて伴奏したこともあったのはブラームスの熟練を示すエピソードである。5月半ばにはハノーファーに入るが、当地で楽長を勤める旧知のヨアヒムをレメーニは少なからず当てにしていたらしい。ブラームスの「非凡な作曲の才能」を認めたヨアヒムは、その資質を「ダイヤモンドのように純粋で、雪のように柔らかい」とさる知人への手紙の中で語っている。月改まって6月初めにヨアヒムの紹介でワイマル入りした二人をリストは懇切に迎える。思いもよらぬ厚遇にたじろぐブラームスは、自作を弾いて聴かせるようにとの主人の懇願にもよく応えられず、ついにリスト自ら演奏をかって出てその「読めた代物ではない」手書きの譜面を初見でみごと弾きこなし、随所にさしはさんだコメントは、作曲者を驚嘆かつまた恍惚とさせた。とはいえ結局リストの好意はそれ以上のものとはならず、長引く滞在に旅立ちを促すブラームスに、かねてからその内気に業を煮やしていたレメーニは、村回りの貧乏旅行など金輪際続ける気はないと宣告、ヨハネスは道半ばにして路頭に迷う。藁をも掴む思いで、ハノーファーを発つ時のヨアヒムの助力の約束を思い出し、ゲッティンゲンに友を尋ねると、再びあいまみえた二人はあらためて友情を確め合い、ようやく気を取り直した作曲家は中断していた旅を続ける。行く先々で様々の音楽家との出会いがあり、益するところ少なくなかったが、先のヨアヒムをはじめ人々の異口同音の勧めにもかかわらず、即座にシューマン訪問を決しかねたのにはわけがあった。即ちかつてシューマンがハンブルクを訪れた時、ブラームスは自作を見て貰いそこねた苦い思い出が胸の底に蟠っていたのである。しかし今や期は巡り、ケルン近傍のメーレムの地に、ライン左岸に広壮な居を構える音楽愛好家ダイヒマンの許で、交響曲、室内楽、合唱曲、歌曲、ソナタ等、シューマンの近作に触れるに及び、積年の不信を一挙に払拭するに足る衝撃を受けた。ホフマンやジャン・パウルの影響の著しい若書きを目にしてさらに驚きは深まる。即ち、かつて自ら戯れに「ヨハネス・クライスラー二世」と名乗ったことのある男にとってそれは、我が分身を見出した驚きに他ならなかった。ただちにデュッセルドルフにシューマン家を訪問、ただちに心底から迎え入れられる。シューマンの日記によれば、それは9月末日のことであった。自作を弾き始めた青年を、シューマンはしばし留めて妻クララを呼び寄せ、あらためて初めから演奏を請う。聞き入る音楽家夫婦を包む、一切不純なものの見当たらない質実な家庭のたたづまいはヨハネスをこよない平安で満たしたが、それを上回る印象をシューマン夫妻はこの若者から得ていたのである。ヨアヒムへの感極った手紙では「数多のパリサイ人が数百年かかっても解明できない黙示録」を書くはずの「真の使徒」とブラームスを呼んでいる。のみならず、自ら創刊した《新音楽時報》に久しぶりに筆をとって紹介の労をとるが、同誌10月28日号の巻頭を飾った「新しい道」と題するR・Sの署名入りの、かの有名な記事がそれにほかならない。

「徐々に段階を追って花開くのではなく、恰もミネルヴァのようにただちに完全な武装を整えて生まれ出た」時代精神のこの上ない体現者、とブラームスを誉めちぎったシューマン最後のこの文章は、しかし当人にはいささか重荷となったのみならず、将来にわたって彼をリスト、ワグナーらの「新ドイツ派」の敵陣に据える働きをした。また、この「使徒」の作品についても蝕れ、「そのピアノソナタはむしろ隠れた交響曲であった」と述べたのは意味深長でもあれば、かつまた書き手の慧眼の証でもある。

翌年1月下旬にはシューマン夫妻がハノーファーを訪れ、ヨアヒムの指揮でシューマンの第4交響曲とヴァイオリン幻想曲、またクララのソロでベートーヴェンの変ホ長の協奏曲等が演奏される。それを祝してシャンパンの杯を傾け幸せな一時を過した一同には、よもやこれが最後の晩餐になろうとは夢にも思い及ばなかったことであろう。

デュッセルドルフに戻ったシューマンの部屋には恐るべき幽霊がとぐろを巻いていた。絶えず有象無象の既知の、また未知の声が彼に語りかけ、歌いかけ、囁きかけて、夜も眠れない。或る夜のこと、シューベルトとメンデルスゾーンの声を聞いたと思った。あの世から変奏曲のための主題が与えられたのである。書き留めたかくも不可思議な主題に基いてその夜のうちにも、変奏曲の作曲にとりかかる。しかし仕事半ばで、ペンを放り出す。27日の昼ごろであった。いつもは厳重に鍵のかかった戸を開けて－それというのも既に度々家を脱け出して自殺を企てる妄想に駆られたことがあったからだが－帽子も被らずに家を後にすると、橋上からライン河に身をおどらせた・・・

ボン近傍のエンデニッヒの施設に病む夫を送った後のクララに付き添って、なにかと世話を焼きまた相談にのったブラームスは、今や彼女にとっても無くてはならない支えとなっていく。絶望的ながらも一段落した病状に、ケルンに出かけてベートーヴェンの第9を聴いたのは、すでに春爛漫のころのことであったが、その偉容に圧倒されたブラームスにとって、とりわけ第1楽章はシューマンの破局と切り離せないものとして脳裡に刻み込まれた。この大作は彼を鼓舞すると同時に絶望に陥れ、70年代始めに至ってなお腹心の友レーヴィに向って、背後に巨人の歩みを聞きながらどうして交響曲を作曲できようかと作曲家は胸中を吐露している。まさしく交響曲のジャンルへのこの畏怖の念が第1ピアノ協奏曲の難産にもひときわ色濃く影を落としていることは否めない。

この「隠れた」交響曲は、先ず初め2台のピアノのためのソナタという仮の姿に身をやつして現れる。しかし渦巻くカオスのような楽想は、ピアノ的書法におさまる筈もなく、ピアノはあくまで管弦楽の代用としての性格を脱し難い。全4楽章として構想されたそのソナタの第2楽章はサラバンドのテンポのゆっくりとしたスケルッツォであったと浄書を目にしたさる友人は報告しているが、この部分はやがて『ドイツ・レクィエム』に転用される。ソナタは、次いで交響曲への脱皮を図るが、終楽章でオーケストレーションに行き詰り、ついに交響曲は実現しない。死産におわったこの終曲の追憶は23年後再び第1交響曲の終曲に取り上げられることになる。換骨奪胎してスケルッツォを外し、交響的性格の薄いところはソロ声部として独立させ、新たなコンサート・ロンドを付け加えてようやく第1ピアノ協奏曲として陽の目をみるにいたる。ティムパニイの連打によるオルゲルプンクト上に、恐るべき跳躍とトリルを伴った壮大な主題が展開するピアノ協奏曲の開始部分、このオーケストラ全体を走り抜ける戦慄震撼こそは、ヨアヒムの推測によれば、シューマンの投身自殺の悪夢を反映したものに他ならなかった。

（次ページへ）

クララ・シューマンは77年9月19日付けのレーヴィに宛てた手紙でこう記している。「私の誕生日（13日）は、おおむね貴方のお察しの通りに運びましたが、ただ、ブラームスがいませんでした。4日遅れて彼はやってきました。それまで暦を見るのを忘れていたようです。ブラームスは上機嫌で、避暑に御満悦で、新しい二長の交響曲が、少なくとも頭の中では出来上がっていました。第1楽章はもう書き上げています。」ほどなくクララの許を訪れてブラームスは第1楽章と、また終曲の一部をピアノで弾いて聞かせる。第1楽章は第1番ハ短調交響曲のそれより「着想が優っている」としてクララは「この曲は聴衆の許で第1より決定的な成功をおさめるでしょう」と予言した。第1で悪戦苦闘の果てに辿りついた交響曲の国に、すでに確固と足をつけたことをこの曲でブラームスは示している。前者に捧げた長い年月にくらべると後者は瞬く間に出来上がったといってもよいほどだが（同年10月完成）、じつは第1の制作中すでに次作の輪郭が作者の脳裡に去来していたかも知れない。少なくとも第1の四手ピアノ用編曲と第2の作曲とは時期を同じくして成立した。光と影のように相補う両者は同じ「深層に隠れた一つの根」から生じたとも察せられるのである。全曲は、その誕生を見守った夏の自然の光輝とそれをとり巻く得も言われぬ香気に満たされているが、その昔、作曲家と同郷のマテソンが語ったように、森羅万象はそれ自体の歌をもち、「山も谷も自ら固有のメロディをもつ」という言葉そのまま、管弦楽の各声部はそれぞれがおのずと自然となって鳴り響く。チェロとファゴットの玄妙な対話のからみあいが恰も巻貝の奥へ奥へと迷い入るような迷宮を想わせるロ長のアダージョの、一見第1交響曲からの転用ではないかと怪しまれる冥暗さも、つぶさに見れば、きわめて濃やかな色彩の重なり合いの結果生じた暗色であると知れる。何か「隠れた」別のジャンルのものではないかと疑わせるようないかなる代用的な抽象性も認められない点からも、この曲は第1と好対照をなす。まさしく同じことが、じつは第1ピアノ協奏曲との比較に於ても当てはまるのではないか。

市川交響楽団 / 本日の出演者

第1ヴァイオリン
亀井　玲子
鈴木　　薫
高田　賀夫
竹内　　甲
竹内　まり
堂本　祐司
永田　　匡
二宮　伸雄
福原　亜希
福原　祥子
福原　　崇
松延　裕子
横田富美子
吉野　淳子
渡辺　昭子

第2ヴァイオリン
石本　恵理
木本　幸子
須永　恒雄
堤　　哲児
崎田真美子
根守　弘和
久田しげ子
平野　弘子
溝田　範子
村上　葉子
村田　康代
横田佐貴絵
吉岡　一郎

ヴィオラ
浅野さとみ
内田　綾美
竹内ひとみ
奈良林弘子
新井本志のぶ
原口　博司
星　　乗昭
村上　賢一
横田　行雄
若林　　繁
渡部　玲子

チェロ
池田　寛之
石村由美子
倉沢　由和
沢田　恵子
瀬川　　清
田頭　　扶
中村　公一
根岸　朋子
樋口　　進
日澤　　優
福原　耕二
横田　朝之

コントラバス
池田　和正
上村　啓介
菊池　克彦
鈴木　重則
長谷川隆子
村上　信乃
八鍬　　健

フルート
佐藤　洋行
篠原　梨絵
木村　純一
木村真諭紀

オーボエ
荒井　　淳
鈴木くに子
二村　直子
山地　順子

クラリネット
一瀬　直美
井垣　貴嗣
多田　準也
時田　　雄
半藤　嗣人
吉野　智久

ファゴット
金坂　　哲
菅原　　斉
古屋　文弘
吉儀富貴子

ホルン
越塚　康央
近藤　利昭
嶋村　恒夫
林田　朋子
藤井　茂司
山本　恭子
山内　正晴

トランペット
安藤　宣明
一桝　泰一

トロンボーン
佐野　義人
古屋　義和
藪崎　裕至

テューバ
谷口　　浩

打楽器
谷口　仁美
都筑　　裕

市響・団員アンケートの傾向と対策

先回の「室内楽の午後(259回)」の後、市川交響楽団は団員にアンケートをとりました.質問はふたつ.(1)どんな曲を演奏したいか(2)指揮者あるいはソリストとして共演したい人は？　これに対して本当に様々な回答が集まりました.今回はこのうち曲目アンケートの結果を、私ども分析隊が独断と偏見をもってレポートしてみたいと思います.

序曲・管弦楽曲編

イワノフ　組曲 コーカサスの風景
ウェーバー　オベロン序曲
オイリアンテ序曲
ヴェルディ　ナブッコ序曲
エルガー　威風堂々
エロルド　ザムパ序曲
ガーシュイン　パリのアメリカ人
グリンカ　ルスランとリュドミラ
●*楽しそうな感じ。ノリがたまらない*
コープランド　組曲 アパラチアの春
ロデオ
サンサーンス　動物の謝肉祭
シベリウス　カレリア組曲
ジャック・イベール　寄港地
シューベルト　ロザムンデ組曲
J. シュトラウス　こうもり序曲
R. シュトラウス　英雄の生涯
薔薇の騎士のワルツ
ティル・オイレンシュピーゲルの愉快な悪戯
●*嶋村さんが吹けるうちに*
ストラビンスキー　火の鳥
スメタナ　モルダウ
チャイコフスキー　弦楽セレナーデ
エフゲニー・オネーギン
デュカス　魔法使いの弟子
ドビュッシー　小組曲
ドリーブ　舞踊組曲シルヴィア
バッハ　管弦楽組曲 第1番-4番
ブランデンブルク協奏曲 第5番
バルトーク　管弦楽のための協奏曲
ルーマニア民俗舞曲
ファリャ　恋は魔術師
フローラン・シュミット　サロメの悲劇
ブラームス　大学祝典序曲
ハイドン変奏曲
●*うねうねした難しさがたまらない*
ピアノ四重奏曲オケ版(シェーンベルク)
プロコフィエフ　ロミオとジュリエット
ピーターと狼
ベートーヴェン　レオノーレ第3番
ムソルグスキー　展覧会の絵
メンデルスゾーン　真夏の夜の夢から
モーツァルト　フィガロの結婚序曲
ポストホルンセレナーデ
魔笛序曲
レクイエム
モートン・グールド　パヴァーヌ
ラヴェル　ダフニスとクロエ第2組曲
亡き王女のためのパヴァーヌ
スペイン狂詩曲
リスト　レ・プレリュード
ワーグナー　ジークフリート牧歌
ローエングリン第1幕への前奏曲
トリスタンとイゾルデ「前奏曲」と「愛の死」
「リエンツィ」序曲

後の交響曲編とは異なりゲルマン系の曲が少ないのが特徴ですね.

グリンカ「ルスランとリュドミラ」のコメントには「楽しそうな感じ.ノリがたまらない」とあります.横一列の二人三脚で鼻歌歌いながら全力疾走できるようにならないとお客さんには楽しさが伝わらないという意味でこの曲は結構難しいもののひとつです.

「嶋村さんが吹けるうちに」というコメントがある**リヒャルト・シュトラウス「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快な悪戯」**.嶋村さんは当団の首席ホルン奏者で今日もブラームスの交響曲でホルンの真骨頂のソロを聴かせてくれます.「吹けるうちに」なんていわずにすぐやりましょう.

ブラームス「ハイドン変奏曲」を「うねうねした難しさがたまらない」なんて表現する、そんなあなたにはノミネートこそされていませんが**シベリウスの「エン・サガ」**を捧げます.スコア見開きに広がる弦楽器の波に感激してもらえることでしょう.

協奏曲編

アルチュニアン　トランペット協奏曲
エルガー　チェロ協奏曲
ガーシュイン　ラプソディー・イン・ブルー
●*羽田健太郎さんで*
グリーグ　ピアノ協奏曲
●*仲道郁代さんで*
サンサーンス　ヴァイオリン協奏曲第3番
●*竹澤恭子さんで*
シベリウス　ヴァイオリン協奏曲
シューマン　ピアノ協奏曲イ短調
ショスタコービッチ　ピアノ協奏曲第1番
チャイコフスキー　ヴァイオリン協奏曲
●*漆原朝子さんで*
ピアノ協奏曲変ロ短調
●*小川典子さんで*
テレマン　Tpと2本のObのための協奏曲
ドヴォルザーク　チェロ協奏曲
●*長谷川陽子さんで*
ハイドン　チェロ協奏曲
●*鈴木秀美さんで。古楽器チューニング?*
トランペット協奏曲
●*寺田俊博さんで*
ピアノ協奏曲
バッハ　ブランデンブルグ協奏曲第1番
ブラームス　ピアノ協奏曲第2番
VnとVcのための二重協奏曲
●*徳永二男さんで*
ブルッフ　ヴァイオリン協奏曲第1番
スコットランド幻想曲
●*小林恵美さんで*
プロコフィエフ　ピアノ協奏曲第3番
フンメル　トランペット協奏曲
ベートーベン　ピアノ協奏曲 第1,3,4番
モーツァルト　クラリネット協奏曲
ホルン協奏曲（何番でも）
トランペット協奏曲
協奏交響曲
●*ビオラは志のぶさんで*
ピアノ協奏曲第20,22,23,27番
ラフマニノフ　ピアノ協奏曲第1,2番
●*横山幸雄さんで*
ラヴェル　ピアノ協奏曲
ラロ　スペイン交響曲
●*大谷康子さんで*
リスト　ピアノ協奏曲
ロドリーゴ　アランフェス協奏曲

協奏曲はさすがにピアノものがだんとつの多さ．ついでヴァイオリン、チェロ、トランペットといったところでしょうか.独奏者の指定が多いのも特徴.「ヴィオラは志のぶさん」とは当団の弦トレーナー新井本志のぶさんです.

協奏曲はオーケストラ側がやりたくても独奏者が首を縦に振らなければ決まらないのが難しいところで、逆にいかに独奏者に納得させるかがオーケストラの力量であったりもします.

「日中交流交響楽の午後(254回)」でヴァイオリン独奏をしていただいた**木佐貫美保さん**(共演者希望アンケートでは同数4人ながらも堂々の第1位)にお願いする曲はどれがいいでしょうか.個人的には**シベリウス**あたりを轟々弾いていただきたいななんて思っております.

(次ページへ)

Die Umfragen hat ergeben, daß...

交響曲編

サンサーンス 交響曲第3番
シベリウス 交響曲第3,4,5,6,7番
シューベルト 交響曲第8番「未完成」
交響曲第9番「ザ・グレイト」
●*少々疲れますが*
シューマン 交響曲第1番「春」
交響曲第3番「ライン」
交響曲第4番
●*シューマンだけはやりたくない*
R. シュトラウス アルプス交響曲
ショスタコービッチ 交響曲第1番
交響曲第5番「革命」
●*ジュニアでやって楽しかった*
交響曲第7番「レニングラード」
交響曲第9番
交響曲第10番
交響曲第14番「死者の歌」
交響曲第15番
チャイコフスキー 交響曲第3番
交響曲第5番
交響曲第6番「悲愴」
ドヴォルザーク 交響曲第7,8番
ハイドン 交響曲第88番「V字」
交響曲第96番「奇跡」
交響曲第100番「軍隊」
ハワード・ハンソン
交響曲第2番「ロマンティック」
ビゼー 交響曲第1番
ヒンデミット 交響曲「画家マチス」
フランク 交響曲二短調
ブラームス 交響曲第4番
ブルックナー 交響曲第5番
●*キザミとテクニックを覚えたので*
交響曲第7番
交響曲第8番
交響曲第9番
ベートーベン 交響曲第1番
交響曲第2番
交響曲第3番「英雄」
交響曲第4番
交響曲第5番「運命」
交響曲第6番「田園」
交響曲第7番
交響曲第9番「合唱付」
ベルリオーズ 幻想交響曲
マーラー 交響曲第1番「巨人」
交響曲第2番「復活」
交響曲第3番
交響曲第5番
●*再度取り上げても良い時期では*
交響曲第8番「千人の交響曲」
交響曲第9番
メンデルスゾーン
交響曲第3番「スコットランド」
交響曲第4番「イタリア」
●*明るい曲だから*
交響曲第5番
モーツァルト 交響曲第31番「パリ」
交響曲第35番
交響曲第36番「リンツ」
交響曲第38番「プラハ」
交響曲第39番
交響曲第41番「ジュピター」
ラフマニノフ 交響曲第2番
ルーセル 交響曲第3番

メインプログラムに座ることの多い交響曲.エントリーされた作曲家は22人のみですいぶん寡占が進んでおり、殆どゲルマン・スラブ系で占められています.このうちランクイン率(アンケートに上がった曲数/生涯に書いた交響曲の数)が高いのは、ベートーヴェン(88%)、シューマン(75%)、マーラー(66%)、シベリウス(62%)、メンデルスゾーン(60%)、モーツァルト(60%ーただし31番「パリ」以降を母数とした)などおなじみの顔ぶれです.

ベートーヴェンは9曲中8曲に投票されています.なかでも第2、第3、第4といわゆる中期最盛期の作品に人気が集まっています.オーケストラ奏者であれば幾度となく演奏しているはずなのにこのような人気を維持しているというのは、やはりベートーヴェンの楽譜は弦楽器にとっても管楽器にとっても聖書のような存在で、何度演奏してもよいということなのでしょう.ところで漏れているのはなんと第8.渋すぎるのが理由ですかね.

シューマンは元々交響曲が少ない(4曲)ため、高率でランクインしました.「オーケストレーションが最低」なんて陰口もなんのその.音楽はメロディーだといわんばかりの健闘ぶりです.反対に「シューマンだけはやりたくない」なんてコメントもあります.オーケストラはなかなか一筋縄ではまとまりません.

マーラーは合唱付交響曲を第2,第3,第8と3曲書いていますが、これらが全部入っているというのが非常に面白いところです.管弦楽曲でも合唱付の曲がいくつか候補に挙がっていましたが、合唱との共同作業は大変勉強になります.マーラーは編成が大きすぎていやだ、という向きには4番に次いで編成の小さく、内容のぎっしりつまったマーラーの第9番をおすすめします.世紀末の風に吹かれるのもいいものです.

シベリウスは8曲(番号付7曲+クレルヴォ)あるうちなんと3番以降が全てランクイン.発病すると抜け出せないといわれる「シベ病」が猛威をふるいつつあるようです.シベリウスは番号が大きくなるにつれて編成は小さく、演奏時間は短くなるという「萎縮型編成」で知られていますが、第1、第2をやらないとすると個人的には出番がないという大問題が...

変わったところだと**リヒャルト・シュトラウス「アルプス交響曲」**(巨大編成.これも嶋村さん大活躍)、**ショスタコービッチ「第9」**(ジターノフ批判の引き金になった問題作)、**ルーセル「第3」**が挙がりました.

分析を終えて

全体として投票はゲルマン・スラブ系の有名曲に集中している傾向にあります.

また交響曲の場合は「番号が大きいほど人気も高い」という傾向があるようです.前出のシベリウスは極端な例ですが、ベートヴェン、シューベルト、チャイコフスキー、ドボルザーク、ブルックナー、メンデルスゾーン、モーツァルト...例外は「巨人」「復活」と第1、第2がならぶマーラーぐらいのものです.

ここまで書いてきてこのリストはCD屋さんの売れ筋とそんなに変わらないのではないかという気がしてきました.また邦人・アジア人作曲家の作品が全くありません.基本に忠実に古典をしっかりという姿勢は正しいことですが、アマチュアとはいえ音楽を心の糧としながらこの時代を生きる者として、時代を捉えるようなレパートリーを広く積極的に開拓していく姿勢があってもよいのではないかと思います.

(団員アンケート分析隊 h_tan)

市川市 市民憲章

わたくしたちは 江戸川の流れと松の緑に象徴される郷土市川と その自然を愛し
由緒ある史跡と伝承をまもり育て 文教都市にふさわしく 教育と文化を重んじ
人間性豊かな調和のとれた明るいまちをつくるために **つぎのことを定めます**

1．**きれいで 安全な より住みよいまち**を つくります
1．**親切で あたたかい 希望にみちたまち**を つくります
1．**教育と文化をそだて かおり高いまち**を つくります
1．**健康で 楽しく働く たくましいまち**を つくります
1．**みんなの幸せを願い 豊かな福祉のまち**を つくります

昭和52年11月3日制定

市響団員募集

当市川交響楽団(市響)は、色々な職業を持つ幅広い年齢層の団員で構成されており、アットホームで楽しく和やかでかつめんどう見がよいことをモットーとしています。社会人の方で、オーケストラで演奏経験のある方、前にやっていてずっと弾いていないけどまた始めたいな、こちらに引っ越してきたのだけどいいオケないかな、一度オーケストラで皆と一緒に演奏したいな、といった方はぜひ当市川交響楽団にぜひ参加していただければと思います。他に、歌を歌いたいのだけどという方は市川混声合唱団、行徳混声合唱団に、いや私はブラスバンドがいいなという方は市川交響吹奏楽団、高校生以下の学生の方は市響ジュニアオーケストラにどうぞ。
1999年8月には、本団が幹事団体となって、全国アマチュアオーケストラ団員が集う「アマオケフェスティバル市川大会」が開催されます。

問い合わせ先
見学や入団ご希望のかたは、下記あてお問い合わせ下さい。
市響インスペクター 時田
TEL 03-3600-0063 / FAX 03-3600-0293
市響インターネットホームページ http://plaza8.mbn.or.jp/~ichikyo/

次回演奏会のお知らせ

第264回 市響

「ファミリー交響楽コンサート」

平成9年12月21日（日）午後2時開演
市川市文化会館大ホール

指 揮	金子建志	
演 奏	市川交響楽団	
曲 目	イベール	交響組曲「寄港地」
	ドリーブ	バレエ音楽「コッペリア」より
	スメタナ	交響詩「わが祖国」より「モルダウ」
	シューマン	交響曲第3番「ライン」 （グスタフ・マーラー編曲版）